

念仏者として独立せん

宗 正元 講述

念仏者として独立せん【目次】

専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ (一)

「教行信証」に学ぶ 11

宗祖がなわれた課題 15

親鸞聖人の出发点 22

行に奉える 32

一乗海 38

自在人・無碍人として成就する道 45

一心の仏因 52

専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ (二)

称名念仏の道 59

阿弥陀の魂 65

自律していく信 70

難信金剛の信楽 78

自心に迷う 88

衆生として生まれる 97

ただ仏恩の深きことを念じて 105

悪重く障多きものよ

現代の根本問題を明らかにする 113

虚仮の行、雑毒の善 119

悪重く障多きもの 123

最勝の直道 128

阿弥陀の智慧 133

いのちの声 138

特に如来の発遣を仰ぐ 149

大悲のいのちに応える 159

現実を機として自覚する信 166

聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと

この身に開かれてくる慶び 183

浄土の声を聞く 190

浄土莊嚴の歩み 201

現実の身を生きる 219

機の深信の確立 227

自我からの解放 242

念仏者として独立せん

「信巻」別序に学ぶ 255

それ以みれば 258

如来選択の願心 265

大聖矜哀の善巧 270

末代の道俗 277

自性唯心に沈む 281

浄土の真証を貶す 288

定散の自心に迷う 301

金剛の真信に昏し 308

念仏者として独立せん 317

お、如来する魂よ

常没の凡愚・流転の群生に託された課題 325

念仏申す身になるということ 333

一切の群生海 341

清浄の心、真実の心なし 349

至心・信樂・欲生の三心 355

随順する大悲 364

姿勢を正す 368

聞法生活 373

本願に帰す 378

あとがき 388

専らこの行に奉え、
ただこの信を崇めよ
(一)

『教行信証』に学ぶ

「宗祖親鸞聖人がなった課題」という講題をいただいたわけですが、親鸞聖人がなわれた課題を書き記しておられるのが『教行信証』ですね。

『教行信証』については、昔から「御本書」、本願寺派では「御本典」といって、真宗の宗義の根本を明らかにするお聖教として尊ばれてきているのですが、これも考えてみなければなりませんね。果たしてそうだろうか。

これは、私がというより、先立っては曾我量深先生が取り上げてくださっているのですが、『教行信証』は親鸞の教学である」と。いわば、親鸞の課題が明らかにされていると。どういことが南無阿弥陀仏の道における課題であるのか。あるいは、南無阿弥陀仏の道は、どのような課題を抱えているのか。そういったことを中心に取り上げてくださっているのが『教行信証』であると。私が曾我先生の教えにご縁があった頃に耳にした言葉の中に、そういうことが残っております。

私自身は、そのことに非常に新鮮なものを感しました。それまで『教行信証』というのは、「御本書」とか、「御本典」と呼ばれるように、真宗の宗義の根本を明らかにする教理の書物みたいに考えておったのですね。それはとんでもないことだなと。実際、読んでみますと、教義とか教理を明らかにするというような書物ではない。

それこそ、『教行信証』を製作なさったお心というものを親鸞聖人は「総序」に述べておられます

ね。いわば、全体の序文になるのですが、その最後の締めくくりのところに、

慶所聞、嘆所獲矣。

(聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。)

(真宗聖典一五〇頁)

とあります。「矣」。発音すればヘインという漢字ですが、それを親鸞聖人はへとんと。これは断定と感嘆を表す言葉ですね。つまり、それ以外のなものでもない。そういう非常に深い慶び、感動ですね。教義とかを明らかにしなければならぬということで「教行信証」を製作したのではない。本当に南無阿弥陀仏の道にお遇いすることができた。それも、南無阿弥陀仏になつて「真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ」(真宗聖典一五〇頁)と。全く「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずる」以外のなものでもない。こういう慶びの気持ち「総序」の文に記しておられますから、「教行信証」全体が、「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずる」ということで貫かれていると言つていいわけでしょう。

また、事実、「良に知りぬ」とか、「明らかに知りぬ」とか、そういう言葉が次々に出てきます。まさに「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずる」以外のなものでもないということが言い表されています。「教行信証」には、文類をずつと取り上げておられますけれども、その文類を受けるようにして、親鸞聖人は「明らかに知りぬ」とか、「良に知りぬ」と。

例えば、「行巻」ですと、称名念仏、名を称する人びとの文類を非常にたくさん取り上げて、それ

を受けるようにして、

明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず。

(真宗聖典一八九頁)

こういつて称名念仏は凡聖自力の行ではないと。名を称する人びとの文類が、そういうことを明瞭にしてくださいと頷かれた。その言葉が「明らかに知りぬ」でしょう。

私どもは称名念仏という発音のことしか思わないけれども、もちろん、発音があることは言うまでもないことだけれども、名を称するということが、そのまま言葉で言い表されているのが文類です。つまり、南無阿弥陀仏と名を称するとは、どういうことなのか。そういうことが言葉で言い表されているたくさん文類が出ております。

そして、次の頁には、

良に知りぬ。徳号の慈父ましますは能生の因闕けなん。光明の悲母ましますは所生の縁乖きなん。

(真宗聖典一九〇頁)

と。「まことに知りぬ」については、「教行信証」の中に四通りあります。

良知

真知

信知

この中の「良」という字が使われているのは、なんというのか、かたじけない、本当にありがたいことだ、というような意味が言い表されておりますね。称名念仏の歴史、称名念仏してこられた人びとの言葉が、随分たくさん取り上げられているのですけれども、その全体を受けて、親鸞聖人は「徳号の慈父」といわれる。徳号というのは、その全体です。「徳号」、南無阿弥陀仏ですけれども、称名念仏の道を歩いていかれた方々の上に表れている、功德に満ち満ちている、それを「徳号の慈父」と。だから、この「徳号」という言葉には、もう称名念仏の歴史全体が包まれていますね。

そして、「光明の悲母」と。もちろん、称名念仏の道を歩まれた方々の文類は、そのまま称名という意味が表れていると同時に、「光明」が表されています。そこに浄土が荘厳されていますね。阿弥陀仏の浄土といえば、南無阿弥陀仏、念仏が開いている世界です。つまり、称名念仏の道を歩まれた方々の歩みが荘厳している世界です。

それは「行巻」に限らないけれども、特に「行巻」は浄土を荘厳している文類でしょう。わざわざ「顕浄土」といっておられるわけですからね。浄土を顕している文類。こういう言葉に尽きますね。それをもう少し詳しく言えば、浄土真実の教、浄土真実の行、浄土真実の証と分かれていきますけれども。だから、『教行信証』に取り上げられている文類は、まず、親鸞聖人にとつての浄土ですね。親鸞聖人は絶えず呼び返され、そこに立ち帰っていかれる。もちろん、親鸞聖人個人にとつてという意味ではなくて、まずは、親鸞聖人にとつて。それは単に親鸞聖人だけの浄土なのかというと、そう

いうわけではありませんでしょう。

私は『教行信証』をいただく時には、そういう態度が大事じゃないかと思えますけどね。一体、『教行信証』に取り上げられているような文類が、われらの浄土として、あるいは浄土の光明として、私どもの闇を照らし出してくださるかどうか。そういうことが一つないと、『教行信証』を学ぶという意味がないのではないですか。ただ学問的に研究したって、何の意味もありません。

とにかく、「徳号の慈父」「光明の悲母」にしても、ここに取り上げてある文類を離れてあるわけではない。この文類が「徳号の慈父」「光明の悲母」として、私どもの中に信心を呼び起こしてやる。そういう喜びが「良に知りぬ」、「良」という字を使って表されている。「信」という字を使って「信に知りぬ」といわれる時は、疑いがひるがえされるといような意味の領きですね。

「総序」の「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり」と述べておられるところでは、「誠なるかなや」と「誠」の字になっていますね。

宗祖がになわれた課題

その「総序」に、親鸞聖人がになわれた課題が非常に端的な言葉で言い表されています。

専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ。